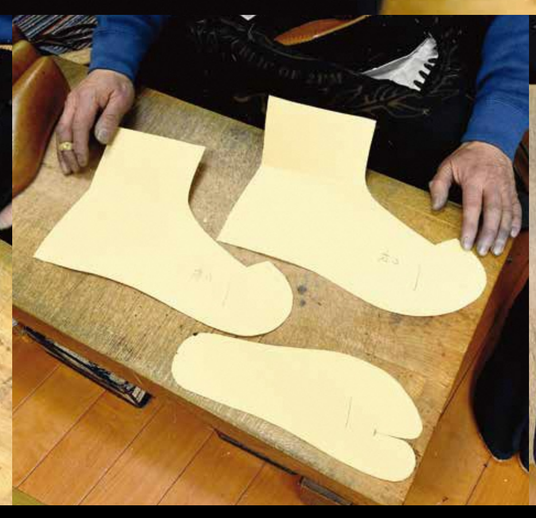
KANUMA NO MEISHO

鹿沼の名匠

大和恵（やまと しげる）

◆手縫い足袋製造

鹿沼市



大和　恵

明治時代から鹿沼で足袋製造を営む「大和屋足袋店」。三代目の恵さんは、１６歳の時から足袋造り一筋の職人さんです。以前は日常生活でも使われていた足袋ですが、現在では主に一部の職人さんや、古来からの武芸道に携わる方々などに使われる品物として、なくてはならないものであります。そのような中で手縫いの足袋を製造されている方は珍しく、栃木県内では大和さんお一人であります。

大和さんの足袋造りは、お客さんの足のサイズを測ることから始まります。型紙を作り、布を裁断し、丁寧に縫い合せていきます。つま先の立体的な形造りは手縫いならではです。専用の木のへらをつま先の内側に当て、外側から木づちでたたき、指への当たりをなくす作業は、履き心地に大きく影響します。縫製に使用する糸は、２本の糸を手で撚り合わせて太くしています。また、コハゼを掛けるところ（掛け糸）は、６本の糸を撚って１本にしたものを自分で作っています。また、かかとや底などの消耗する部分には、補強を施したり、ゴム底の縫い付けでは、２重に縫い付けたりと、手間をかけ、たいへん丈夫に仕上がっています。

最近では、ＳＮＳの普及もあり、全国各地から注文が来ていますが、古くからのリピーターもたいへん多く、たくさんのお客さんの型紙が保管されています。特に、ユネスコ無形文化遺産である鹿沼秋まつりの関係者の多くが、大和さんの足袋を愛用しています。大和さんは、足袋以外にも、まつりで使用する“腹掛け”や“股引き”なども製造しており、地域にとって、欠かせない存在となっています。「お客さんから、大和さんの足袋でないとだめだと言われるのが嬉しい。これからも、お客さんに喜ばれる足袋を造り続けたい。」と話しています。